

大阪府内には、日本一の数を誇るものづくり企業があります。それだけ多くあれば、中にはとても面白いことをしている企業があるに違いない……なのですが、MOBI6の取材記事は、間違いなくとびきりの魅力溢れる企業ばかり。どんな話を掲載するか、編集者を悩ませるとびきりのネタをぜひご覧ください。

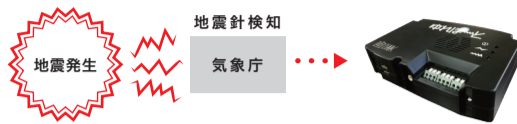
続く▶ [モビウェブに全文掲載中!](http://www.m-osaka.com/jp/moov/) <http://www.m-osaka.com/jp/moov/>

1 「命を守る10秒」へ取り組む 緊急地震速報受信機。

1995年1月17日午前5時46分、神戸などを襲った阪神・淡路大震災。あれから25年。その後も幾度となく震災はおきている。だからこそ地震が発生した際、大きな揺れがいつやってくるのか知りたいと思う人は多い。アイザックが開発した「ゆればーと」は、設置場所の緯度、経度、地盤増幅度情報を個別に設定し、ピンポイントで地震情報を知らせる事業者向け緊急地震速報サービス。スマートフォンやテレビなどの地震速報よりも早く、「●秒後に震度●の地震がきます」と、揺れの大きさから地震が来るまでの時間を教えてくれる。もうひとつの特徴が拡張性。「例えば「ゆればーと」と施設内の放送設備と連動させ、館内に音声で一斉に地震が来ることを知らせたり、工場や現場であれば機器などの自動停止、ビルや集合住宅であればエレベーターの制御、エントランスの開放といった人命の安全確保が早急にできます」と浜崎重孝代表取締役は話す。

今年30周年を迎えるアイザックは、業務系ソフトウェアを企業の用途に合わせてオーダーメイド開発することからスタートし、オリジナルのパッケージ商品の制作販売へ。現在はこの「システム開発部門」に加え、大学などの研究機関向けに研究機材の販売を

緊急地震速報 工場・物流センターでの活用例



気象庁のサーバーから送られた、体に感じない震動の「P波(初期微動)」を解析、地盤の固さ等も加味して揺れがくる前に推定震度や猶予時間を通報する

- 放送設備との連動**
工場内へ緊急地震速報を一斉放送
- 回転灯との連動**
音の大きな作業現場では緊急地震速報が聞こえづらい
- 製造ラインとの連動**
揺れる前に緊急停止させ機器の被害を最小限に

おこなう「理化学部門」、そして「緊急地震速報サービス部門」として「ゆればーと」の開発・販売を展開。この「ゆればーと」は大阪府の平成28年度新分野・ニッチ市場参入事業化プロジェクトに採択された。現在は、大手企業や大型施設、工場や物流センター、公共施設などにも設置されている。もともとは自社が誇るソフトウェアの技術力を可視化するために、「ゆればーと」は生まれた。同時に浜崎氏自身が阪神・淡路大震災の被災者であり、システム開発を通じて命を助ける仕事がしたいという想いがあった。「たとえば和歌山県沖が震源だった場合、「大阪に到達するまで1分」と分かれば、その1分の猶予時間になんらかの行動が起こせます」と対策の重要性を訴える。わずかな時間を有効に使うためには日頃からの訓練も必要だ。「ゆればーと」はそういった危機管理の意識まで高めてくれる。続く▶

株式会社アイザック

<http://www.isaac.co.jp/>
大阪市中央区道修町2-2-11 ベルロード道修町10F
TEL 06-6226-0704



ゆればーと <http://www.u-report.jp/>



軽くて小さい「ゆればーと」は社内でソフト以外の製作も手がけた。USB、LAN、HDMIのポートを持ち、機器の制御をはじめ、ほかのシステムと連動させることも可能

2 キャラクターもの依存から脱却、オリジナル商品で活路を拓く。

小さい時に使っていたお弁当箱といえば、大好きなキャラクターの絵柄がついたものという人は多いだろう。1971年創業のプラスチック家庭用品総合メーカーの小森樹脂は、このキャラクター弁当箱で定評のある企業。だが2016年に就任した小森聡明代表取締役社長のもと、同社は今一度オリジナルに立ち返って新たな飛躍を目指している。

かつてキャラクターものといえばヒーロー・ヒロインの戦隊物が中心だったが、今ではアニメやゲームなどキャラクターの選択肢が増えたうえ、親が子どもに持たせたいものも変化。また量販店の減少で売り場面積が縮小、競合他社との競争も激化した。こうした時代の流れを見据えてキャラクター依存から脱却、オリジナル商品の生産の比重を増やす方向転換だ。とはいえ、これは原点回帰。同社はもともと取り出しやすい箸箱をはじめ、オリジナル商品でスタートした会社だからだ。現在オリジナル商品として同社の認知度を上げているのはドーム型ランチボックスシリーズで、毎日使うものとしての使い勝手を徹底追求している。ドーム型のフタは美しい盛り付けをそのままキープ可能。底にはエンボス加工が施されているので汚れもカンタンに落ち、丸みのあるコーナーも洗いやすい。これらオリジ



今春発売予定の新作プレスシリーズ。箸箱は中で箸がカタカタならないようスプーパがつけれ、スライドした本体が折れ曲がることで箸が取り出しやすい

ナル商品の売上は右肩上がり、OEMの受注も増えた。同時にさまざまな取組みにも着手。2018年4月に承認された経営革新計画では、2つのテーマを掲げている。まずは生産・在庫管理システムを導入し、手間のかかる棚卸や在庫管理を効率化させ、余力を企画・営業に移行させるというもの。これが完成すればスムーズな生産体制が確立し、繁忙期と閑散期を平準化できる。もうひとつは「海外市場向け商品の企画開発及び新規販路開拓」だ。海外進出では後発となる同社が取った秘策は、国内とは逆にキャラクターものの展開。「海外でも人気の日本製のキャラクターを日本製のお弁当箱で売る」。国内ではオリジナル商品に磨きをかけ、同時に海外では切り札としてキャラクターを使う。これまで築きあげた同社の財産があるからこそできる戦略だ。続く▶



商品のよさを伝えるために特徴をポップで伝え、見本を手にとってもらえるような小型の仕器を販促物として制作し、売り場に提供している



株式会社小森樹脂

<http://komorijushi.co.jp/>
東大阪市玉串町東3-1-11 TEL 072-966-1655

3 「5ミリでダウンの暖かさ」、新素材カボックが冬の装いを変える。

アパレルの世界でも、近年エコやサステナブルを謳う商品は増えている。しかしその志に賛同しつつも、着心地やデザイン、そして価格の点から様々な制約があるのが現状。原料開発から商品企画・生産までを手がけるアパレルメーカー双葉商事が2019年発表したコートブランド「カボックノット」はそんな現状に一石を投じるもの。同社は創業から先進的な挑戦を続け、2019年には「大阪ものづくり優良企業賞」を受賞した。最近ではワコールの人間科学研究所と協力し、スタイルをきれいにさせるパンツや機能性素材を使った特許商品など、まだ世にないアイテムを送り出している老舗アパレルメーカーだ。冒頭のコートもそんな双葉商事の画期的な商品だ。2019年開始されたカボック事業は、深井喜久代表取締役社長の息子である、アパレル事業部営業部長の深井喜翔氏が立ち上げたもの。東南アジアなどに自生する樹木「カボック」の繊維は中が空洞になっているため、コットンの1/8の軽さと湿気を吸って暖かくなる吸湿発熱という特性を持ち、「木になるダウン」と呼ばれるほど。しかし繊維長が短すぎて糸にするのは難しいとされ、これまでは救命具やクッションの詰め物などにしか使われず、衣類への利用は少なかった。同社では大手繊維メーカーと協力して合成繊維を混ぜる手法を確立し、コートの中綿に使うことに



厚さたった5mmで、ダウンの暖かさ。特殊な製法で着ぶくれしない、スリムなシルエットを実現した「カボックノット」



成功。商品化に向けて、クラウドファンディングサイト「Makuake」で資金を募ると、目標額を遥かに超える約1700万円もの金額が集まり、「カボックノット」ブランドとして昨冬デビューした。このカボック事業は、ものづくりのしなみを改革する画期的なものだ。カボックの綿は実から採取するため、樹木を伐採する必要はなく、栽培に農業や化学肥料を使うことがないサステナブルな素材。また、カボックの需要が増えれば、東南アジアでの雇用創出や緑化、さらには森林保全のサイクルが生まれるという。深井代表は「はじまったばかりのプロジェクトですが、カボック製品を通して人にも地球にも優しい、サステナブルな社会を実現したい」と話す。循環型ビジネスの最前線がここにはある。続く▶



深井喜翔氏とインドネシア農家の人たち。カボック製品の売上の一部を現地に還元し、カボックの改良などに使い、現地の雇用を生み出し、次のカボック製品の素材として使用する循環型社会を目指す



1972年から参入したボウリング事業。ここから着想を得た専用ウェアは、プロボウラーの姫路麗選手のプロデュースのもと国内トップシェアを誇るまでに成長



双葉商事株式会社

<http://www.futabashoji.jp/>
吹田市千里山東1-7-18 TEL 06-6387-8128

続きは

